旅は一人旅が最高

――旅は神々の賜りものかも？――

田川　進

和辻哲郎の「古寺巡礼」が私の旅行の原点の様な気がします。若い頃、「古寺巡礼」をカバンに入れ、神社仏閣や各地の名所旧跡を訪ね歩いた記憶がよみがえってくる。今年、八十路を迎えた。改めて我が人生を振り返ったとき、各地を歩いた旅の情景が日々の暮らしと一緒に思い出され、誰かに見守れているような気がしてならない。

よく旅をした頃と言えば昭和３０～４５年代、その頃の経済活動は盛んであったが旅に対する情報は現在と比べ少なかった。

旅の語源を調べるとまさに当時私が抱いていた旅への憧れ、旅への心構えを的確に表現する言葉に出会いました。旅（たび）の語源は今住んでいる家、土地を離れる意味を表現する他日（たび）発日（たび）あるいは家のかまど以外の火を使った料理を食する他火（たび）から派生した言葉と記載されていた。最後に一説では賜る（たまわる）を語源とするとも記載していた。旅とは神からの賜りもの、神々からの賜りものを語源として、そこに現代的な脚光を当て価値を再発見して地域の発展に貢献することの意義の大切さが記載されていた。私には理解しにくい内容であったが〈賜る〉という言語にカチンと来るものがあった。この言葉には〈与えてもらうとか、自分の身を低くしてもらう〉といった上から目線を連想して、嫌いな言葉でした。旅先でのもてなし、旅先で得た交流などは、今思い出しても暖かいものがある。旅への記憶の中では〈旅は与えられたものでなく、積極的に関わっていくもの〉であった。

旅は生きていく上で必要なものである。旅は自分の可能性を信じて挑戦していくものである。旅は生きるためにぶれない一つの信条を築くものである。そこに助け合い精神があり、生き甲斐精神が底辺にあった。旅することは珍しい風景を見ることを最終目的にするのでなく、その過程を重要視していた。一人旅はこうしたことを可能にする近道であったことを自負したい。旅は他日（たび）、発日（たび）、他火（たび）を語源するだけでは終わらせたくない、貴重な教育材料として受け止めている。

旅は一人旅が最高

私は学校卒業してから結婚まで会社の寮住まいをしていた。そのため常に相談する友人や話し相手の友人がいた。友人との話題は趣味の話や人生論など多岐に渡った。囲碁を覚えたのもスキーを覚えたのも先生格やライバル格の友人がいたからである。時間を気にしない寮生活が大いに幸いした。私が旅行好きになったのも寮生活をしていたことが大きな因になったと思っている。

休日になるとハイキングにもよく行った。

大型の連休を迎えると、そんなハイキング好きな連中が集まり、今度は北アルプスに行こうとか八ヶ岳に行こうとの話しになって実行された。登山靴や本格的なリュックの購入は先輩格の友人が先導してくれたので苦労することはなかった。これも寮生活ならではのメリットであろう。

学生時代は足に自信があったので寮の友人から誘われた登山は喜んで参加していた。しかし次第に険しい道は皆から遅れ気味になり自分は山登りには不向きではないかと自覚するようになった。それ以来、不参加が多くなり山から遠のいた。そんなことを繰り返しているうち、先輩同輩から聞く各地の祭りや地域のイベントを写真に収めたい気持ちが高揚し、気持ちは各地の観光や史跡めぐりと写真に傾いていった。

旅行は当初から一人旅であった。山登りで購入したキャラバンシューズやリュックは大いに利用できた。一人旅にこだわった理由は二点ある。行きたいところへ行き、行きたい時間に行ける気ままな旅は一人旅だから実行できる。また、宿舎や観光地が遠いところは交通に頼らず歩いて目的地に行くことが好きだった。歩くことは健康にいいこと以上に、道行く人にお話を聞いたり、思わない景色に出会えることがあり、密かに期待していたのかも知れない。健脚の自負は登山ではあっさり降参したが、旅行では役に立った。

旅行でこだわったのは一人旅のほかに宿泊はいつもユースホステルであった。ポケットサイズの全国のユースホステルガイドと宿泊するたびに押すスタンプ帳を常にカバンの中に入れていた。旅のプランはまずスタンプを見て、押していない地方を優先した。スタンプ台帳はスタンプを押す枠が無くなるとスタンプ枠のみを購入して、スタンプ台帳の最後のページにテープでつなぎ合わせた。長いスタンプ帳を持つことがホステラーの自慢であった。ホステルの管理人や友人同士で見せ合いして自慢した。そしてスタンプを中心に旅のよもやま話を披露した。

旅行はユースホステルに宿泊することで旅の楽しみが倍増した。ユースホステルに宿泊すると夕食後必ずミーティングがあった。これも寮生活をしていたことが役に立った。話

題の少ない田舎から出てきた私、話は苦手だったが、寮生活で話好きになっただけでなく話すコツが身についていた。人の話を聞く、自分の話をする時のタイミングを知る、これが自然に身についていた。寮生活では管理人や先輩、同輩、後輩と様々な方がいる。言葉使いに気を付けていた。我々の若い頃はこうした躾が自然にできていた。

地方の風習や伝統的な文化等があれば自分が納得するまで見ること聞くことができる。これも一人旅ならできる。知りたかった話題は時間が許すかぎり質問をした。

ユースホステルを利用する旅行は、まず泊まるホステルがあることをガイドブックで調べることから始まる。ユースホステルの弱点は殆ど交通の不便なところに建っていることが多い。観光地の真ん中とか交通が良いところにあるのはわずかである。したがって翌日の仕事に支障がないように交通便の調査など確認することが大変だった。

現在はユースホステルを利用した旅はあまり話題に上らない。金銭的に余裕がでてきたことが原因だろう。ユースホステルは料金が安く軽装で行けることが魅力だった。しかし食事の後片付けや寝具はセルフサービス、自分でしなければならない。もう一件、夕食後に行われたミーティングは時間にして1～2時間、強制的でない。自由に旅行の目的や見どころを紹介してくれる。時には体験者や管理人が人生観や地域の風習など幅広い知識を披露することがあった。

今でも鮮明に残っている風習は柿の名産地の柿にまつわる風習である。柿の収穫は全部収穫するのでなく、一個か二個、収穫しないで残しておく。旅する旅人や腹がすいた鳥のために残しておく風習で〈柿守り〉という。豊作のおすそわけをする風習で、古くから日本人の持っている奥ゆかしい心配りやおもてなしの心情が具体的に残っている風習として後世に残したいとメモをした。

旅の漢字は軍旗の下に多くの人が集まって移動する人達を表現しているらしい。私にとって旅の軍旗とは自分を育んできた一つの信念、心情だろうと思う。伝統的な文化や風習そしてそれらを育んできた人々に会って、沢山知りたい、触れたいことだろう。その心情・信念で全国各地を移動してきたことになるのではないか。旅は私を大きく寛大に育ててくれた。同時に人と対話することと助け合い精神や生きることの大切さも教えてくれた。

旅は絵画鑑賞に似ているのではないかと思うことがある。絵画鑑賞は孤独と静寂が絶対必須条件であるが旅は違う。自然と地域に根ざす伝統と風習を知ることなので雑踏が付いて回る。

絵画と陶芸鑑賞が大好きだったにも関わらず、旅の伝統と風習を構成する奥ゆかしさを知ることの認識は私には足りなかったと反省する。

私は旅が終ったあと、旅の喧騒から離れた一時、孤独と静寂に浸る時間が少なかったよ

うな気がする。八十路を迎えて旅を回想した時、それは旅を神々の賜りものとして敬虔(けいけん)に受け取っていなかったのではないか！　旅の語源に賜りものと書かれていたのは、そうした心構えが旅には必要と説いたのではなかったか！と思う。

一人旅は見知らぬ大地で孤独との闘いであった。反面、教えられたことは多かった。一人旅、最高！　万歳！